

2011年 3月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 29



紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 21

(聞き手 高橋素子)

高橋 > **かくれんぼ春は近くに來てをれど**

本日のご挨拶は、私の駄句で始まりましたが、「三寒四温」と言う言葉が、今の季節には本当にぴったりですね。

会長 > 「三寒四温」は、中国北部の気象の現象を言い表わしたもので、冬の季語になっています。今年は寒い日が多くて、「四寒三温」、「五寒二温」ですね。

高橋 > 良い機会ですので、今の季節の季語、「冴返る」を用いて、滑稽句と川柳の違いが分かる一句をお願い出来ないでしょうか？

会長 > 「冴返る」は、季節感の緊張感を、心理的なものに転用しています。名句がありますよ。

冴返るもののひとつに鼻の先 加藤楸邨

川柳は気持を説明するものですから、

冴返る心地よ約束すっぱかし 健

高橋 > 成る程！とても良い勉強になります。

では、本日の本題に参りますね。前回に続いて「夏の部の人事」、季語は「麦粉」です。

麦粉ははったい粉とか麦こがしとか言われ、大麦を炒って粉にしたもので、砂糖を加えたり、水や湯で練る食べ物です。

麥の粉やむせて腹立つ大笑ひ 諷竹
むせるなと麥の粉くれぬ男の童 召波
麥の粉を食ひしと見へて鼻の先 紅緑

会長 > 「麥の粉や…」、
この句は笑ひと腹立ちが同居する可笑しさです。むせたりしないと決意したのにむせて腹が立ったのです。

「むせるなと…」、
むせる事を想定して麦の粉をくれたという意地悪の可笑しさですね。

「麥の粉を…」、
麦の粉が鼻先に付いているとも知らず来客に應對という風景でしょう。

高橋 > なるほど、その場の情景が浮かんで来ますね。
次の季語は「甘酒」。暑い時に熱い甘酒を飲むことは、かえって暑さ忘れになる
と好まれた様で、甘酒は夏の季語なのですね。

甘酒に舌を焼いたる戀もあり 紅緑

会長 > 甘酒の熱さに舌を焼いたとは、恋の相手に手を焼くという事でしょう。

高橋 > 次は、「夏書(げがき)」。これは、夏安居(げあんご)といって、夏に僧侶達が修行している間、経文を書写すること。またその書写した経文の事です。

味噌汁をくはぬ娘の夏書哉 蕪村

会長 > 「夏書」という仏教の伝統行事に熱心な反面、古来の味噌汁に見向きもしない娘の可笑しさを言っているのですね。

高橋 > 次の季語は、「晝寝」ですよ。

ばらまいたやうに昼寝の大家族 健

会長の、この句、野良仕事の休憩のひとつを詠まれたとのことですが、「ばらまいた」が可笑しいですね。紅緑の句集の、晝寝の句はどうでしょうか。

人並に晝寝したふりする子哉 一茶
人を見てまたまた無理に晝寝哉 一茶
内閣を辞して薩摩に晝寝哉 子規

お昼寝どころか西郷隆盛は、征韓論に敗れて下野し、故郷の薩摩に戻ったけれど、これが結局一八七七年の「西南の役」に繋がりますよね。

茶屋女盧生の晝寝起しけり 子規

昼寝で見る「盧生の夢」は、「邯鄲の枕」と同じ意味ですね。続けてご説明下さいね。

餘り長き晝寝なりけりと起されぬ 虚子
口あいて魂抜けし晝寝かな 霜磧
ものいへばあちら向いたる晝寝かな 塵外
孔子去て三千年の晝寝かな 蕪洋

そう言えば孔子は、紀元前五五一年～四七九年の中国・春秋時代の学者。儒学の祖ですね。ほぼ三千年前ですか…。

庭下駄に鼻あげて犬の晝寝哉 紅緑
晝寝して覺れば今日やら明日じやら 紅緑
門弟に病と稱して晝寝かな 紅緑

会長 > 「人並に晝寝…」、
昼寝をしている様に見えて、薄目を開けているのでしょうか。寝た振りがばれているのも知らずに…。

「人を見て…」、

来客の気配に昼寝から目覚めたものの、嫌な奴が来たと、関わらない様に寝たのでしょ。

「内閣を辞し……」、
子規としては、西郷さんは新しい国づくりに力を合わせるべきなのに、どうして薩摩に帰ってしまったのかと、合点が行かなかった。昼寝でもしているのかと、からかっているのですね。

「茶屋女……」、
盧生と同じく楽しい栄華の夢をみている最中に、子規は起こされてしまった。気のきかない奴とでも言っているのでしょ。

「餘り長き……」、
まあ報告の句ですね。虚子は手当り次第、句にしましたからね。こうした報告句も散見されますね。

「口あいて……」、
昼寝を良く描写しています。「魂抜けし」と言うのは、無防備ということです。どんなに地位の高い人や知識人であっても、理性的でなくなるのが昼寝です。謹厳実直な校長先生あたりが鼻提灯を点して口を開けている風景と、目覚めている時の落差が大きいほど可笑しいのです。

「ものいへば……」、
昼寝の人に声を掛けたら、もう少し寝させてくれと……、その意思表示です。そろそろ寝覚めの頃と思ったのに、裏切られた可笑しさ。

「孔子去て……」、
想像で言えば、孔子は昼寝の名人と言われた。蕪洋は孔子に勝るとも劣らない昼寝の名人だと、自負しているのです。

「庭下駄に……」、
犬は嗅覚が鋭く、ご主人様が大好きならば、下駄の鼻緒に染み付いた悪臭も安心の臭い、そういう風景ですね。

「晝寝して……」、

昼寝覚めは、どなたも体験される様に、暦の日付が変わったかと錯覚するものです。日付が変わらなかったのか、変わったのか、しばし悩むものです。

「門弟に…」、
門弟の手前、昼寝は格好がつかない。体調不良などと言い訳をして昼寝するわけだが、昼寝すればその日は夜更にする。そして翌日も仮病を使って昼寝、という具合ですね。

高橋 > 次の季語は、「日傘」。会長も読者の想像力をかきたてる俳句の例として、次の句をあげられていますね。

ふたあつの日傘ひとつは良うごく 健

百九年前の滑稽句はどうでしょうか。

覗かんとすれば傾く日傘かな 格堂
日傘なく芋の葉かさす男かな 塵外
日傘して帯と帯とが御辞儀哉 紅緑

会長 > 「覗かんとすれば…」、
覗かれないから日傘を傾げるわけで、今の時代ならセクハラと言われるかも。

「日傘なく…」、
芋というのは里芋のことですね。日傘代わりに芋の葉をかざす。トンチがきいた男に滑稽味がありますね。

「日傘して…」、
日傘をさしたまま挨拶をすると、作者に見えたのは、帯だけだったのですね。

高橋 > 成る程、面白いですね。次は「扇」です。

古扇二本さしたる下部かな 蕪村

夕暮の腮(あご)につつはる扇かな 一茶
むしをうつ時は鈍なる扇かな 大江丸

会長 > 「古扇二本…」、
下部と言うのは、身分の低い人。捨てるべき古扇を貰って、一本ならまだしも二本差している。まるでお侍の二本差しの様な得意顔の風景に、滑稽味が有りま
すね。

「夕暮の…」、
「つつはる」は突っ張るという意味。昼間は開いて使いますが、夕暮れともなれば、扇を閉じて頼杖代わりに使ったのでしょう。

「むしをうつ…」、
扇は開いてこそ、巧みに舞う華麗な小道具です。閉じて虫打つ時は、竹の枠の骨を使います。ところが舞をする様な方は、虫を打つ様な所作は不得手です。鈍に見えるのですね。

高橋 > 次の季語は、扇よりもっと日常的な「團扇」です。
もっと面白そうな句が期待出来そうですよ。

雪隠に去年ながらの團扇かな 也有
突きさして團扇忘るる俵かな 蕪村
禪に團扇さしたる亭主かな 蕪村
屁をひつて裾あふぎたる團扇かな 紅緑

会長 > 「雪隠に…」、
年越しをした団扇をお手洗いで用を足しながら、しげしげ眺めている。詩情があるとも、ないとも微妙な句です。

「突きさして…」、
俵に団扇の柄を差して、米を少し取り出し、今年の米の出来を確かめて、そのまま団扇を忘れたのでしょう。

「褌に……」、
褌に差したというのは、褌ひとつで人前には出られない。団扇を差す事で軽装になるのです。そう言えば佐藤紅緑の息子のサトウハチローは、夏は全裸で過ごし、来客があると団扇で前を隠して対応したそうですよ。

「屁をひつて……」、
男性の場合、袴を着用していると、悪臭がいつまでも籠もる。そこで裾を持ち上げて扇ぎ、悪臭を追い出したのです。

高橋 > 本日も頓智に富んだ面白いご解説、本当に有難うございました。次回がまたまた楽しみです。

では、本日も、今回の季語を使って、
お馴染みの「虎造節」の一節、よろしくお願い致します。

会長 > 麦こがしいい 食ひし口い開けえ 昼寝えして 邯鄲の夢見てえおれば
来客ありとおお起こされる かねて招いた人おなれば 季節たがえど 冴え返る
ううううう

ちょうど時間となりましたああ またの口演つかまつるうううう